

『栄花物語』における病と死の描写 — 『源氏物語』との比較による考察 —

小笠原愛子

The Depiction of Illness and Death in “Eiga Monogatari” — A Comparative Study with “Genji Monogatari” —

Aiko OGASAWARA

Abstract

Many excellent expressions in the “Eiga Monogatari” were the result of it being a historical tale, recording facts. They can be evaluated as excellent literary expressions.

In “Genji Monogatari,” the illnesses that the main characters suffer from are the illnesses enumerated in the chapter “The Illness is ...” in “Makura no soshi.” I consider the illnesses described beautifully to be a typical technique in Japanese literary works of the time. “Eiga Monogatari,” which was significantly influenced by “Genji Monogatari,” has many similarities with “Genji Monogatari” in terms of characterization and narrative styles. When comparing how to describe illnesses and suffering in the two stories, however, “Eiga Monogatari” has more various patterns than “Genji Monogatari,” as “Eiga Monogatari” has many excellent descriptions that “Genji Monogatari” does not have.

Keywords: “Genji Monogatari” 『源氏物語』, “Eiga Monogatari” 『栄花物語』, illnesses 病,
dying hour 臨終, epidemic illness 疫病

1. はじめに：

『枕草子』『源氏物語』に見える

「典型」と『栄花物語』の特異性

『源氏物語』の主要登場人物が患う様子が、ある程度以上の紙幅を費やして直接かつ具体的に描写される⁽¹⁾病は、『枕草子』に「病は」として列挙されている「胸」「物の怪」「脚の気」「ただそこはかたなくて物食はれぬ心地」のいずれかであり、それ以外の病名が挙げられている場合には、病苦の様子が直接かつ具体的に詳述される例は見られないことを、拙

稿「描かれた病—『枕草子』と『源氏物語』に見る典型—」⁽²⁾において指摘した。そして、それら、『枕草子』「病は」に列挙され、『源氏物語』に直接かつ具体的に描写された病は、当時の実社会において最も恐れられた、或いは罹患者が多かった病とは異なる病であること、またその描写にも一定の傾向が指摘できることから、「文学作品に描かれる病の典型」の一つとして理解できることを述べた。

本稿では、上記で確認した典型を踏まえ、『源氏物語』の直接的かつ顕著な影響のもと

に成った最初の歴史物語である『栄花物語』をとりあげて、作中での病と死没の描写を『源氏物語』と比較する。『栄花物語』は、事実の記録を旨とする歴史物語であり、それ故『源氏物語』には語られなかった病への言及が多く見られるからである。そこに、『栄花物語』が、歴史物語として成ったが故になされた、『源氏物語』を超える表現を見出し、『栄花物語』の達成の一端を明らかにしたい。

2. 『源氏物語』において

物語展開上重要な意味を持つ病

『源氏物語』では、前項で述べた典型例以外の病は、物語展開上極めて重要な意味を持つ場合にも、直接かつ具体的に病態を描写されることがない。光源氏が若紫を見いだす契機となり、朧月夜との密通とその露見に関わる瘧病⁽³⁾や、光源氏への迫害に対する故父院の怒りを知らしめ、光源氏召喚を促した朱雀帝の眼病は、『源氏物語』の展開上重要であるにもかかわらず、『源氏物語』中の記述のみからはそれがどのような病態かを知ることにはできないのである。

一方、桐壺更衣・藤壺宮・紫上等、男主人公の最愛の女性とされる女君達の病死は、それぞれ相当の紙幅を費やして哀切に描写されるものの、具体的病名は述べられず、死因となった病が何であるのかは明確でない。

2.1. 瘧病

《源氏の瘧病》

瘧病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ、加持などまゐらせたまへどしるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる。去年の夏も世におこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひあまたはべりき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、疾くこそこころみさせたまはめ」など聞こゆれば、召しに遣はしたる

に、「老いかがりて室の外にもまかでず」と申したれば、「いかがはせむ。いと忍びてもせん」とのたまひて、御供に睦ましき四五人ばかりして、まだ暁におはす。 (「若紫」①199)⁽⁴⁾

源氏は何度も瘧病の発作を起こしており、世間でも去年から流行していると述べられるが、発作の様子が具体的に描かれることはなく、『源氏物語』中の「瘧病」への言及からは、「瘧病」がどのような病気なのかは分からない。それは以下に引く朧月夜の例も同様である。

《朧月夜尚侍の瘧病》

そのころ尚侍の君まかでたまへり。瘧病に久しうなやみたまひて、まじなひなども心やすくせんとなりけり。修法などはじめて、おこりたまひぬれば、誰も誰もうれしう思すに、例のめづらしき隙なるをと、聞こえかはしたまひて、わりなきさまにて夜な夜な対面したまふ。いと盛りに、にぎははしきけはひしたまへる人の、すこしうちなやみて瘦せ瘦せになりたまへるほど、いとをかしげなり。 (「賢木」②143)

朧月夜も長期間患っていたと述べられているが、やはり具体的な症状は描写されていない。『源氏物語』において瘧病に罹患したと語られるのは源氏と朧月夜のみで、この瘧病は物語の展開上重要な意味を担っており、その意味を論じる研究も多数存在する。それにもかかわらず具体的な症状が描写されないのは、次に確認する眼病も同様である。

2.2. 眼病

『源氏物語』中で唯一の眼病の例は、朱雀帝への故父院の「さとし」の一つであり、朱雀帝退位のきっかけでもあるという、極めて重要な意味を担っている。

《朱雀帝の眼病》

その年、朝廷に物のさとししきりて、もの騒がしきこと多かり。三月十三日、

雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御事なりけんかし。いと恐ろしいとほしと思して、後に聞こえさせたまひければ、「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。

睨みたまひしに見合はせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひてたへがたう悩みたまふ。御つつしみ、内裏にも宮にも限りなくせさせたまふ。

(明石 ② 251～252)

朱雀帝の眼病は、「もののさとし」、つまりその治世の不徳のあらわれであるとされている⁽⁵⁾。夢で故父院に睨まれた際に目を合わせたために目を病む、という展開であり、「眼病」であることの必然性も明らかである。

この朱雀帝の眼病も、物語展開上重要な意味を有し、「たへがたう悩みたまふ」とその重篤さが述べられるにもかかわらず、先に見た瘡病同様、その病態は本文からは読み取れない。発熱や痛みの有無、視力が損なわれたのか否か、顔貌に外見上の異変があったのか否かなど、具体的な病状は述べられていないのである⁽⁶⁾。

2.3. 女君の死

『源氏物語』における主要な女君の臨終は相当の紙幅を費やして哀切に描写され、いずれも急病ではなく長患いであったと述べられているものの、具体的に何の病気だったのかは語られていない。以下に桐壺更衣・藤壺宮の死を語る部分を引用する。

《桐壺更衣の死》

その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常

のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほしばしころみよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏してまかでさせたまつりたまふ。……(中略)……

「かぎりとして別る道の悲しきに

いかまほしきは命なりけり
いとかく思ひたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、……(中略)……

御使の行きかふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、

(「桐壺」 ① 21～23)

桐壺更衣は「はかなき心地にわづら」ったと述べられ、帝との別れの場面では息も絶え絶えの苦しげな様子で、瀕死の重病として描かれているが、病名や病態は明らかでない。

また、これ以前からも長期にわたって体調不良が続いていたと述べられているが、やはりどこがどう悪いのかは語られていない。

《桐壺更衣の病弱》

朝夕の宮仕につけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人の誹りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。 (「桐壺」 ① 17)

このような叙述は、藤壺宮や紫上にも共通している。

《藤壺宮の病弱》

……おとなしき御後見はいとうれしかべいこと」と思したまひて、さる御気色聞こえたまひつつ、大臣のよろづに思しいたらぬことなく、公方の御後見はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こまか

なる御心ばへのいとあはれに見えたまふを、頼もしきものに思ひきこえたまひて、いとあつしくのみおはしませば、参りなごしたまひても心やすくさぶらひたまふことも難きを、すこしおとなびて添ひさぶらはむ御後見は、かならずあるべきことなりけり。〔澁標〕②322)

藤壺宮も、死の床に就くよりもかなり前から「いとあつしく」と病気がちであったことが語られるが、病名等は述べられていない。

以下に引く藤壺宮の死を語る部分でも、長大な文章で、長患いであること、無理な勤行により柑子もうけつけないほど弱ったこと、臨終の際には話をするのも苦しうであったこと等が述べられているが、ここにもやはり具体的な病名は見えない。引用部冒頭の二重傍線部では、「世の中騒がしく」と疫病の流行が述べられているものの、藤壺宮が疫病に罹患したとは語られておらず、病状の進行からも疫病とは考え難い。

《藤壺宮の死》

その年、おほかた世の中騒がしくて、公さまに物のさとししげく、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光見え……(中略)……あやしく世になべてならぬことどもまじりたり。内大臣のみなむ、御心の中にわづらはしく思し知ることありける。

入道後の宮、春のはじめよりなやみわたらせたまひて、三月にはいと重くならせたまひぬれば、行幸などあり。……(中略)……宮もいと悲しく思しめさる。「今年はかならずのがるまじき年と思ひたまへつれど、おどろおどろしき心地にもはべらざりつれば、命の限り知り顔にはべらむも、人やうたてことごとしう思はむと憚りてなむ、功德のことなどもわざと例よりもとりわきてもしはべらずなりにける。参りて、心のどかに昔の御物語もなど思ひたまへながら、うつしぎまなる

をり少なくはべりて、口惜しくいぶせて過ぎはべりぬること」と、いと弱げに聞こえたまふ。三十七にぞおはしませける。されど、いと若く盛りにおはしますさまを、惜しく悲しと見たてまつらせたまふ。つつしませたまふべき御年なるに、晴れ晴れしからで月ごろ過ぎさせたまふことをだに歎きわたりはべりつるに、御つつしみなどをも常よりことにせさせたまはざりけることと、いみじう思しめしたり。ただこのごろぞ、おどろきてよろづのことせさせたまふ。月ごろの常の御なやみとのみうちたゆみたりつるを、源氏の大臣も深く思し入りたり。限りあればほどなく還らせたまふも、悲しきこと多かり。

宮いと苦しうて、はかばかしうのものも聞こえさせたまはず、……(中略)……

(源氏は)年ごろ思し絶えたりつる筋さへ、いま一たび聞こえずなりぬるがみじく思さるれば、近き御几帳のもとに寄りて、御ありさまなどさるべき人々に問ひ聞きたまへば、親しきばかりさぶらひてこまかに聞こゆ。(藤壺宮の女房は)「月ごろなやませたまへる御心地に、御行ひを時の間もたゆませたまはずせさせたまふ積もりの、いとどいたうくづほれさせたまへるに、このごろとなりては、柑子などをだに触れさせたまはずなりにたれば、頼みどころなくなせたまひにたること」と泣き嘆く人々多かり。

(藤壺宮は)「院の御遺言にかなひて、内裏の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかはその心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、いまなむあはれに口惜しく」とほのかにのたまはするもほのほの聞こゆるに、御答へも聞こえやりたまはず泣きたまふさまいといみじ。……(中

略) ……心になふわざならねばかけとどめきこえむ方なく、言ふかひなく思さること限りなし。(源氏が)「はかばかしからぬ身ながらも、昔より御後見仕うまつるべきことを、心のいたる限りおろかならず思ひたまふるに、……(中略)……」と聞こえたまふほどに、灯火などの消え入るやうにてはたまひぬれば、いふかひなく悲しきことを思し嘆く。

(「薄雲」② 443～447)

紫上や宇治大君の臨終も、苦しい息の下から別れの会話を交わした後に、「まことに消えゆく露の心地して限りに見えたまふ」(「御法」④ 506)「ものの枯れゆくやうにて、消えはたまひぬる」(「総角」⑤ 328)というもので、比喩によって儂い美しさが描かれる一方で、身体の具体的異変には言及されないという描写のあり方がよく似ている。衰弱してなお美しい女君が、男君と別れの会話を交わり、看取られつつ息を引き取るという場面は、物語の女君の臨終の典型であるといえよう。しかし、この哀切な臨終の描写から、具体的な病名や病態を読み取ることはできない⁽⁷⁾。

紫上と宇治大君については、間近で看取った人物の視点からその死顔の美しさが描写されている。

《紫上の死顔》

……(前略)……大殿油を近くかかげて見たてまつりたまふに、飽かずうつくしげにめでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしさに、この君のかくのぞきたまふを見る見るも、あながちに隠さんの御心も思されぬなめり。

「かく何ごともまだ変らぬ気色ながら、限りのさまはしるかりけるこそ」とて、御袖を顔におし当てたまへるほど……(中略)……まことに心まどひもしぬべし。御髪のだうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れた

るけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。灯のいと明かきに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはすことありし現の御もてなしよりも、言ふかひなきさまに何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなしと言はんもさらなりや。なのめだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入る魂のやがてこの御骸にとまらむと思ほゆるも、わりなきことなりや。

(「御法」④ 509～510)

一筋の乱れもない見事な黒髪、灯火に白く輝く肌、もはや意思を失った死顔が、生前の隙のない挙措よりも寧ろ完璧な美を体現している様子が、彼女を思慕し続けた夕霧の視点から描写される。源氏は「まだ何も変わっていないが」と述べており、ここでの紫上には死相が表れていない点も、次に引く宇治大君の例と共通している。

《宇治大君の亡骸》

中納言の君は、さりとて、いとかかることあらじ、夢かと思して、御殿油を近くかかげて見たてまつりたまふに、隠したまふ顔も、ただ寝たまへるやうにて、変りたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを、かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかばと思ひまどはる。今はのことどもするに、御髪をかきやるに、さとうち匂ひたる、ただありしながらの匂ひになつかしうかうばしきも、ありがたう、何ごとにてこの人をすこしものめなりしと思ひさまさむ、まことに世の中を思ひ棄てはつるしるべならば、恐ろしげにうときことの、悲しさもさめぬべきふしをだに見つけさせたまへと仏を念じたまへど、いと思ひのどめむ方なくのみあれば、言ふかひなくて、ひたぶるに煙にだになしはててむと思ほして、とかく例のことどもするぞ、あさましかりける。空を歩む

やうに漂ひつつ、限りのありさまさへはかなげにて、煙も多くむすほれたまはずなりぬるもあへなしと、あきれて帰りたまひぬ。（「総角」⑤329～330）

薫は、二重傍線部で「大君の死顔に恐ろしく疎ましい死相でも見つけられれば彼女への執着を捨てられるのに」と述懐しており、ここでも紫上同様に生前と変わらぬ美しさが描かれる。生前は注意深く隠していた顔が、意思を失った死後に薫の正視にさらされ、その比類ない美が認識されている点でも紫上の例に似ている。大君は生前から身体的儂さが繰り返し強調される人物で、髪についても豊かさではなく芳香が語られているが、これも死体であることを感じさせない美しさの描写である。火葬の煙さえ少ないのも身体性の希薄な大君に相応しいであろう。

『源氏物語』において美しく描かれる死顔は、いずれも死相、つまり身体的変化の見られないものである。例えば某院で怪死した夕顔の死相は、以下のように述べられる。

《夕顔》

……（中略）……つと抱きて、「あが君、生き出でたまへ、いとみじき目な見せたまひそ」とのたまへど、冷え入りにたれば、けはひもの疎くなりゆく。

（「夕顔」①167）

夕顔の亡骸についての具体的描写は「冷え入」っていることのみであるが、その明らかな「死体らしさ」は、たとえ愛しい夕顔であっても「もの疎く」と述べられる。ここは夜半の廃院での怪異を描く場面であり、夕顔の「もの疎」い死相もその不気味な恐ろしさの一環として描き出されている。

3. 歴史物語における病描写

『枕草子』及び『源氏物語』が成立した当時、疫病（赤裳瘡・疱瘡）は最も恐れられていた病の一つであったと考えられるが、『源氏物語』の主要登場人物が疫病に罹患した様は描

かれない。また所謂「水飲病」も、罹患する貴族は多かった病でありながら、『源氏物語』には描かれていない。「にきみ」は腫瘍から面皰まで広く腫れ物を指し、それ故に患者も多かったと考えられるが、やはり『源氏物語』には登場しない。これらは『枕草子』や『源氏物語』が表現しようとする当時の文学的な美にはそぐわないが故に、語られていないのではないだろうか。しかし、歴史物語である『栄花物語』には、当然ながらこれらの病への言及が多く見られ、しかもその描写にも『源氏物語』の病描写にはない具体性が見いだされる。本項では、『栄花物語』の病描写を確認していく。

3.1. 疫病

赤裳瘡は、極めて感染力が強く、当時最も恐れられた病の一つである。皮膚の瘡等、特徴的な病態を有するが、『源氏物語』で赤裳瘡に罹患した人物への言及はない。一方、『栄花物語』では、史実を反映してその流行が述べられ、特に道長女嬉子が罹患した様子は、多くの紙幅を費やしてつぶさに語られている。

《赤裳瘡の流行》

かくいふほどに、今年は赤裳瘡といふもの出で来て、上中下分かず病みののしるに、初めのたび病まぬ人のこのたび病むなりけり。内、東宮も中宮も、督の殿など、皆病ませたまふべき御年どもにておはしませば、いと恐ろしういかにいかにと思しめさる。

（巻第二十五 みねの月 ②480）⁸⁾

《妊婦嬉子赤裳瘡に罹患》

よろづよりも、督の殿、この赤裳瘡出でさせたまひて、いと苦しう思しめしたりとて、殿にはののしりたちて、いみじく思しあわてさせたまふ。……（中略）……この督の殿は、この月などにこそはさ（＝出産で）おはしますべきに、いと恐ろしき御事なりと嘆かせ給ふに、

御裳瘡いと多く出でさせたまひて、平らかにおはしませど、日ごろ苦しい思されて、いと堪へがたげなる御気色になりつれど、晦日にはおこたらせたまひぬれば、世にうれしきことに思し喜びたり。……(中略)……

督の殿の御瘡かれさせたまひつれど、御物の怪の気色のいと恐ろしくて、まだ御湯もなし、かかるほどに月もたちぬ。

(巻第二十五 みねの月 ② 491～492)

先に、『源氏物語』では身体に現れる症状・異変への言及がなされていないことを確認したが、ここでは発疹と瘡蓋の状態が具体的に述べられる。『源氏物語』には描写されず、『栄花物語』が詳述するディテールである。

3.2. 水飲病

水飲病も当時の貴族社会では罹患者が多い病であったと考えられる。水を大量に欲しがり食べても痩せていくという特徴的な症状であるが、やはり『源氏物語』には言及すら見られず、『栄花物語』には頻出する。

《伊周薨去》

帥殿は日ごろ水がちに、御台などもいかなることにかとまできこしめせど、あやしうありし人にもあらず、細りたまひにけり。御心地もいと苦しい悩ましう思さる。うちへ御齋にて過ぐさせたまひし時は、いみじうこそ肥りたまへりしか、今は例の人の有様にて過ぐさせたまへど、かかる御事をいかなることにかと、心細しと思さるるままに、松君の少将何ごとにも人より勝りて思さるるも、いかながはならんとすらんと、あはれに心苦しう思し嘆くも、ことわりにいみじう、あらぬ世をあはれにのみ思さるるも、げにとのみ見えきゆ。

(巻第八 はつはな ① 441)

《後一条天皇》

内には水きこしめし、面痩せさせたまふなどぞ、人々申すめる。いかなる御事

にかと思し嘆かせたまふに、三月つごもりよりは、わざと苦しいせさせたまへば、中宮も上らせたまひて、上の御局におはします。御裳着も延びぬれば、いと口惜しきことを思しめす。……(中略)……

内の御悩み、日を経て重らせたまひて、四月十五日ばかりより、日ごとに絶え入らせたまふ。女院、中宮涙にくれておはします。三位たちもいと睦まじき人なれば、一つにておはします。つひに四月十七の夕方うせさせたまひぬれば、二所ながら院も宮も同じさまにておはしませば、聞えさせわづらひて、かくてのみはいかでかとして、御せうとの殿ばらぞ、下の御局に、御衣に押しにくみて率ておろしたてまつらせたまふ。

(巻第三二 譚合・巻第三三

きはわびしとなげく女房

③ 257～261)

明かな水飲病の症状が語られ、続いて死没が述べられる。具体的な症状ではあるが、見苦しい病態として語られているわけではなく、周囲の人々の心配や嘆きなども記述されて、あわれな死没記事となっている。

3.3. にきみ

にきみも、実態は様々であったと考えられるが、やはり罹患者の多い病である。『源氏物語』には言及さえない一方、『栄花物語』には具体的な描写が多々あることは、先の疫病や水飲病と同様である。

《東三条院詮子》

かかるほどに、女院ものねせさせたまひて、悩ましう思しめしたり。殿御心惑はして思しめし惑はせたまふ。はかなく思しめしに、日ごろになれば、わが御心地に、いかなればにかと、心細う思さる。内にも、例ならぬさまに思ほしのたまはせしものを、いかがおはしさんと思しめすより、やがて御膳なども御覧じ入れさせたまはず、よろづに思しめり

たるを、御乳母たちもいかかと見たてまつる。……(中略)……御有様を医師に語り聞かすれば、「寸白におはしますなり」とて、その方の療治どもを仕うまつれば、勝るやうにもおはしませず。

日ごろになればにや、汁などあえさせたまへれば、誰も心のどかに思ほし見たてまつるに、ただ御物の怪どものいといとおどろおどろしきに、御修法数をつくし、おほかた世にあるかたの事どもを、内裏方、殿方、院方など三方にあかれて、よろづに思ほしいそぎたり。……(中略)……

かく苦しげにおはしますに、この若宮(=嬬子内親王)はいみじう騒がしうあはてさせたまふを、御懷を離れさせたまはずむつれたてまつらせたまふを、御乳母に、「これ抱きたてまつれ」とものたまはず、つくづくと掬せられたてまつらせたまふほどの御心ざし、いみじうあはれに、気近きほどにさぶらふ僧なども、涙を流しつつさぶらふ。

(巻第七 とりべの ① 346～348)

『源氏物語』では言及すらされない「にきみ」が、これほどに詳述されるだけでも注目すべきことであるが、二重傍線部では「汁(膿)」が出たという極めて即物的な描写がなされ、『源氏物語』の描写との性質の違いは明らかである。しかもこれは読者に嫌悪を抱かせるための描写ではなく、死の近い栓子が衰弱しながらも嬬子内親王を懐に抱き愛育したというあわれ深い場面に続くのであり、周囲の人々の落涙も述べられる。

《後朱雀天皇のにきみ治療》

十二月の二十日余りのころ、内に御にきみおはしまして、薬師ども参りなどして、すこしわづらはしう申しけり。いかなるべき御心地にか。(以上巻三十五)

内の御にきみのこと、なほおこたらせたまはねば、いかにとむつかしう思しめ

す。ついたちの有様など同じことなり。日ごろの過ぐるままに、「なほ水など沃させたまひてやよからん」と申せば、その作法の御しつらひして沃たてまつる。いと寒きころ、堪へがたげに見えさせたまふ⁽⁹⁾。上東門院の入らせたまひて見たてまつらせたまふ御心、譬へむ方なし。

(巻第三十五 くものふるまひ・

巻第三十六 根あはせ

② 327～② 331)

後朱雀天皇のにきみについては、冷水を注ぎかけるという過酷な治療と、それによって苦しむ帝の様子も具体的に述べられており、この点も、薬湯と加持祈祷以外の加療が具体的に述べられない『源氏物語』とは異なっている。

3.4. 死没場面の描写

『源氏物語』における女君の死没場面は、美しく哀切ではあるものの、描写が一様で、物語の女君の臨終場面という一種の典型に沿ったものであったことが見てとれた。それに比して『栄花物語』における臨終場面は、やはり具体的であることが目を引く。

《嬬子薨去》

日ごろ赤瘡よりしてうちつづき御物の怪のゆゆしかりつれば、いみじう弱らせ給へるに、物もつゆきこしめさず。御物の怪その後音なく、皆人たゆみたり。かつは恐ろしと思しめしながら、いとかばかりの御宿世なれば、誰もたけう心やすく思されたり。日ごろ御湯殿もなかりつれば、明日ぞ御湯殿あるべければ、「明日にとくなれかし。湯浴みてさはやかにならん」とのたまはず。御前にも、そこらの人も寝ずかたみに起きつつ、そのこととなけれど、よろづに仕うまつり明かす。

……(中略)……若宮の御湯殿も、「今日は疾く」など、そそのかし仰せらるるに、「辰の時」ばかりに、子持の御前いた

うちあくばせたまひて、いと苦しげなる御気色おはしますを、御前にさぶらふ人々、いかにいかにと見たてまつりて、殿の御前にかくなど聞こえさすれば、「僧なども退けたれば、御物の怪のするなめり」とて、御読経、またさるべき僧どもみな参りて、諸心にいとodorodorしく。

……（中略）……御帳の外に、御枕のそばの方にて、心誉僧都、権僧正など加持参らせたまふ。御読経にも声よき僧どものかぎりは、御前近くさぶらひて、声も惜しまず。……（中略）……さらにいと堪へがたげなる御気色にて、末の時ばかりになりぬ。……（中略）……東宮よりはた隙もなけれども、御返りはかばかしく聞こえさせたまはず。殿の御前御帳の内に、兎をするやうにつと添ひ臥したまひて、泣く泣くかかへたてまつらせたまへり。おほかた誰も誰ものおほゆる人なし。通はせたまふ御声も、やがてうせもてゆくやうなり。あないみじ、心憂きわざかなと思しながら、よろづを尽させたまふほどに、酉の時ばかりに、すべてただ蚊の声ばかり弱らせたまふに、そこら満ちたる僧俗、上下、知るも知らぬもなく、願を立て額をつきののしる。えもいはぬものまで涙を流して、「観音」と申さぬなく、ただ額に手をあてて起居礼拝したてまつらぬなし。今は加持の声も聞えず、「観音」とのみ申しののしる。一人が一声を申すだに、いかかは験おはすなるに、ましてそこらの人の、同じ心に一心に念じたてまつるほどは、さりともそこそは見えさせたまへ。されどすべて限りになり果てさせたまひぬ。御年十九。あないみじ、あさましと思しめす。

（巻第二六 楚王のゆめ ② 504～507）

記録のごとく、時間を追って臨終が迫る様を活写している。「うちあくふ」という、い

よいよ危篤となったことを示す具体的な症状が語られ、嬉子の声がだんだんと弱々しくなっていくという記述と相まって、彼女の生命が消えつつあるさまが克明に描き出される。加持祈祷についても、僧の占める位置等が具体的に述べられ、その点でも人物の発言や表情のみに焦点を絞る『源氏物語』の臨終描写とは異なっている。嬉子の臨終を頂点として高まっていく僧俗の祈りの声も、『源氏物語』の臨終場面にはない臨場感と昂揚感をもたらしており、これらの叙述は、事実の記録であればこそなした優れた描写であるといえよう。

《嬉子の亡骸》

……（前略）……殿の御前にも上の御前にも、御殿油を取り寄せて、近うかかげて見たてまつらせたまへば、いささかなき人ともおほえさせたまはず、白き御衣の薄らかなる一襲奉りて、まだ御帯もさせたまへり。御乳はいとうつくしげにおはしますが、いたう硬るまで膨らせたまへれば、白丸ををかしげにて臥させたまへるに、御髪のとこちたう多かるを、いと緩にひき結はせたまひて、御枕上にうち置かれたるほど、いとodorodorしう、寝させたまへるやうなるを、殿の御前、上の御前、今ぞ泣かせたまふ。

（巻第二六 楚王のゆめ ② 509～510）

死相が見えないという点は『源氏物語』と共通するが、若い産婦であった嬉子の乳房の様子が具体的に描かれている点は、顔以外の身体の即物的描写がほとんど見られない『源氏物語』との大きな相違である。傍線部の直前にも妊婦の腹帯がそのままになっていることが述べられ、そのような亡骸の具体的な描写が嬉子哀惜をかきたてる。

《嬉子への湯殿奉仕》

かくてうせさせたまへれば、むつかしう思しめさるらむとて、小式部の乳母、よろづにおりたちて、御湯殿せさせたま

つる。こたみばかりの御宮仕と思ひつつ、言ひつづけ泣く声ぞいみじきや。上の御前の、御身をさぐらせたまふに、いとひややかにおはします。これこそは例の人に變らせたまへることはありけれど、殿の上も、「われを捨ててはいづち、いづち」と、泣きまらばせたまふことかぎりなし。

(巻第二六 楚王のゆめ ②513)

遺体の冷たさが生々しく語られるが、それは『源氏物語』「夕顔」の例の如く遺体特有の「疎ましさを惹起するものではない。

乳母が、亡骸となった嬉子が「むつかしう思しめさるらむ」と、「こたみばかりの」奉仕をするさまは、先の引用部分で、生前の嬉子が湯浴みを心待ちにしていたと述べられていたこととも呼応して、いやがうえにも哀切である。

4. おわりに：歴史物語の表現

『栄花物語』は、『源氏物語』の直接的影響下に成った作品であり、人物描写や表現においても、『源氏物語』に拠ったとおほしい箇所が多く指摘されている。しかし、病と死の描写に注目すれば、『栄花物語』の記述内容は『源氏物語』よりもはるかに多様で、しかもそこには事実に基づくが故の具体的描写が多く見いだされる。そのような『栄花物語』の描写の具体性、分けても身体描写の具体性は、『源氏物語』にはない表現として優れた叙述をなすものであり、『栄花物語』が、歴史物語であるからこそなし得た、『源氏物語』を超える文学的達成として評価できるものである。

《注・引用文献》

- (1) 患う人物の様子を、語り手が傍で見ているように描写しているものを「直接かつ具体的に描写」されているとした。「病気になる」という事実を述べるだけで、病苦の様子は描写されない、いわば噂話

をするように語る叙述と区別したものである。

- (2) 『大阪夕陽丘学園短期大学紀要』第63号(2021年1月)
- (3) 「瘡病」に注目した先行研究は、多くが「密通」あるいは「性愛」「情熱」と結びつけるものである。以下に挙げる。
 - ・飯沼晴子氏「源氏物語における〈病〉描写の意味—表現論の一卷として—」(『國學院雑誌』第83巻2号(1982年2月))
 - ・神尾暢子氏「源氏物語の疾病規定」(『源氏物語の探究』第16(1991年11月))
 - ・室伏信助氏「源氏物語の発端とその周辺」(『王朝物語史の研究』(1995年7月 角川書店))
 - ・久富木原玲氏「源氏物語の密通と病」(『日本文学』50(5)(2001年5月))
- (4) 『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集『源氏物語』により、私に傍線等を付した。
- (5) 前掲注3の神尾暢子氏前掲論に、「不明の君主」であることのアラわれとの指摘がある。
- (6) 『大鏡』三条帝紀に語られた三条帝の眼病の病態が具体的描写を有しているのと比べると、その違いは顕著である。『大鏡』においては、三条帝の目は外見上の異常が看取されず「清らか」で、視力についても見える時もあったことなどが具体的事例とともに述べられ、愛娘禎子内親王の美しい髪を撫でつつ見られないことを嘆く哀切な場面が続く。治療の苛酷さに苦しむ様子や、原因とされる薬の名や物の怪の名乗りも語られ、極めて情報量が多い。また『大鏡』においては、三条帝退位の理由がこの眼病であるとされ、三条帝紀の内容の殆どを占めている。『源氏物語』において、朱雀帝の眼病が退位のきっかけの一つとなっていたことを思

い出させるが、実際の病状、特に身体の状態を描写するか否かという大きな相違が指摘できる。

- (7) 宇治大君の衰弱のきっかけは、食物を受け付けなくなったことであるが、直接の死因となった病が何であるのは明らかでない。
- (8) 『栄花物語』の引用は、新編日本古典文学全集『栄花物語』①～③により、一部私に傍点・注記を付した。
- (9) 前掲注6にあげた『大鏡』の三条帝の眼病及び風病治療も、「もとより御風重くおはしますに、医師どもの、「大小寒の水を御頭に沃させたまへ」と申しければ、凍りふたがりたる水を多くかけさせたまけるに、いとみじくふるひわななかせたまひて、御色もたがひおはしましたりけるなむ、いとあはれにかなしく人々見まらせけるとぞうけたまはりし。」(新編日本古典文学全集『大鏡』三条院 51) というものである。冷水を注ぎかける治療を受けさせられた天皇(院)が耐え難い冷たさに震えたという描写が似通っている。